



# 芝山小だより

10月号

清瀬市立芝山小学校

校長 清水 一臣

<http://www.kiyose.ed.jp/>

## コロナ禍の中で考えたこと —物事を自分事として捉える—

副校長 中島 孝

2020年全米オープンテニス大会に特別な思いをもって臨んだテニスプレイヤー、大坂なおみ選手。彼女は、試合を通して自分の意思を世に訴えました。自身の中にある正義心が熱く燃えたことで、想像以上の力を発揮し冷静に試合を進めることができたのではないのでしょうか。テレビ等のニュースによれば、当初彼女は米国でのことは自分には関係ないと思っていたそうです。しかし、その後彼女は言いました。「私はアスリートである前に1人の黒人女性です。」と。彼女は、私も偏見をもたれている黒人なのだとして捉えることができるようになったのです。

物事を自分事として捉えることは、思いやりの心を土台として、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量ることです。学校では主に「特別の教科道徳」の授業でこのことを学びます。

道徳の授業は、児童が将来出会うかもしれない出来事に対して、人間として誠実な判断力を身に付けるためのものです。例えば現在のコロナ禍において社会でどのような出来事が起きているのか、その中で大人たちは子供たちに手本となる判断を見せなければなりません。

毎日テレビから流れるニュースでは「本日の感染者数は・・・。」と伝えていきます。「私たちの町や職場、家庭や学校等で感染者がいなくてよかった。」と思うことは決して悪いことではないと思いますが、他人事として考えている限りは、もし身近に感染者が出た時、その人の気持ちに自分事として寄り添うことは難しいと思います。

人は、物事を自分事としてとらえられるようになると、他者の気持ちが理解でき、共感が生まれ、思いやりの心が芽生えます。

文部科学大臣からのメッセージに

「新型コロナウイルスには誰もが感染する可能性があります。感染した人が悪いということではありません。・・・(略)

感染した人や症状のある人を責めるのではなく、思いやりの気持ちを持ち、感染した人たちが早く治るように励まし、治って戻ってきたときは温かく迎えてほしいと思います。・・・(略)」とありました。

偏見による無責任な言動は、身近なところにもあります。

私たち日本人は、昔から他人の身に起こった出来事を自分事に置き換えて考え、相手の気持ちを「察する」教育を受けてきました。

本校においても道徳の授業を要として、すべての教育活動を通して、物事を自分の身になって考え、偏見や無責任な言動でみんなの心を傷つけることの無いように取り組んで参ります。

どうかご家庭におきましても、感染防止とともに、物事を自分事として捉えることについてお子様と向き合い、話し合っただけであれば幸いです。